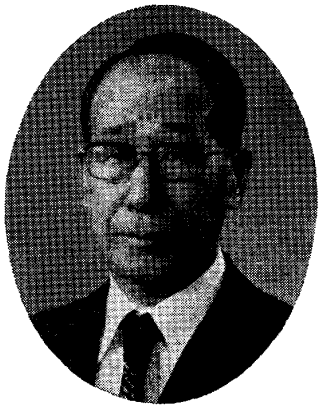
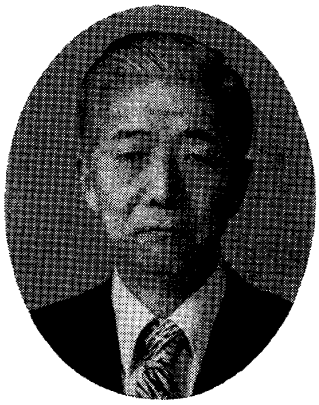
日本鉄鋼協会役員

会長



松下幸雄君
東京大学名誉教授・日本鋼管(株)顧問

副会長

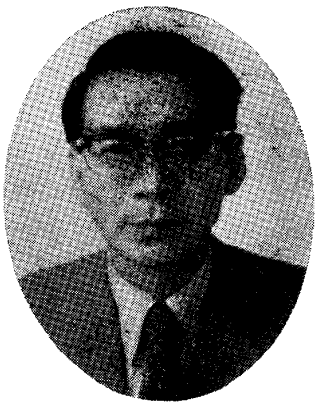


中村正久君
長岡技術科学大学教授

上杉年一君
山陽特殊製鋼(株)副社長

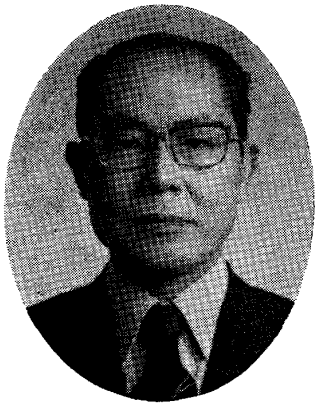
理事

木下亨君
専務理事

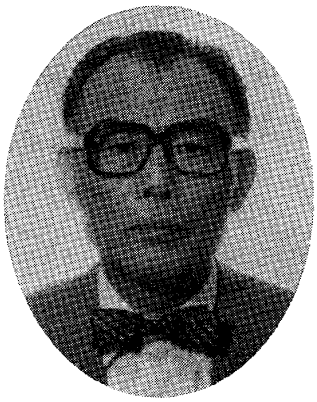


三井太佶君
常務理事

伊藤慶典君
(会計担当)
住友金属工業(株)取締役



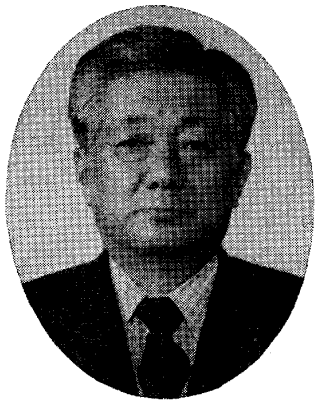
大　森　康　男君
(編集担当)
東北大学教授



岡　田　秀　彌君
(研究担当)
新日本製鉄(株)取締役・基礎研究所所長

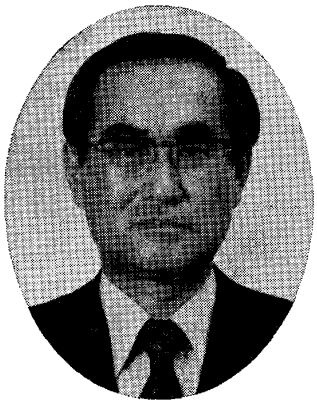
加　藤　栄　一君
(研究担当)
早稲田大学教授

金　尾　正　雄君
(編集担当)
金属材料技術研究所
疲れ試験部部長

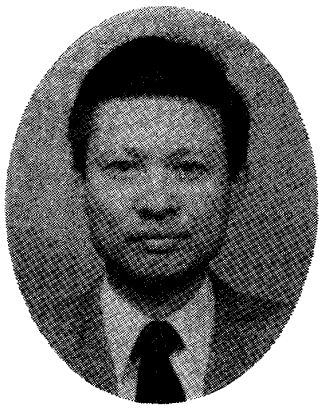


岸　田　寿　夫君
(庶務担当)
大同特殊鋼(株)常務取締役

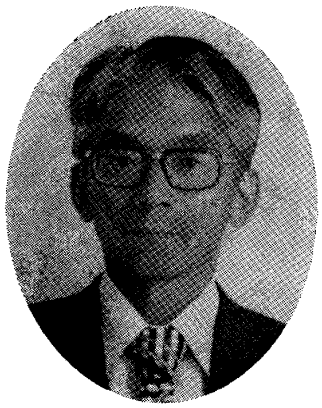
久　能　一　郎君
(企画担当)
東洋鋼鈑(株)専務取締役



佐　伯　　修君
(企画担当)
(株)神戸製鋼所専務取締役



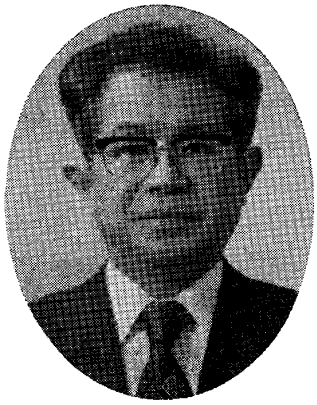
佐　野　信　雄君
(編集担当)
東京大学教授



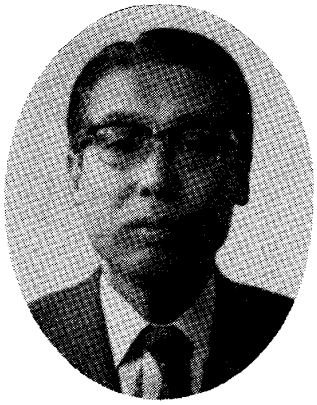
鈴　木　朝　夫君
(企画・編集担当)
東京工業大学教授

須　藤　　一君
（研究担当）
東北大学教授

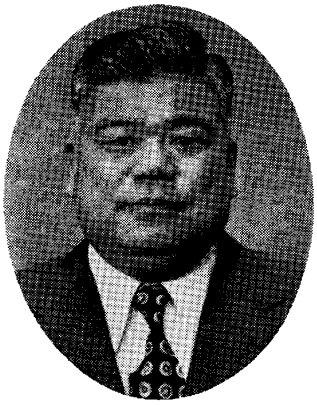
角　南　　平君
（庶務担当）
国際協力事業団
鉱工業開発協力部部長



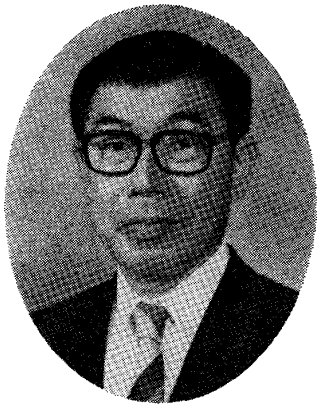
田　村　今　男君
（編集担当）
京都大学教授



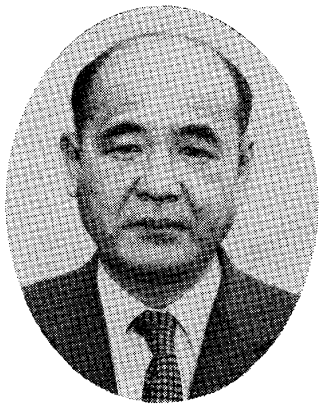
高　橋　忠　義君
（研究担当）
北海道大学教授



辻　井　和　正君
（企画担当）
（株）中山製鋼所常務取締役



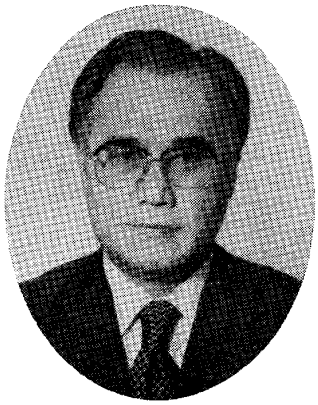
濤　崎　　忍君
（会計担当）
川崎製鉄（株）常務取締役



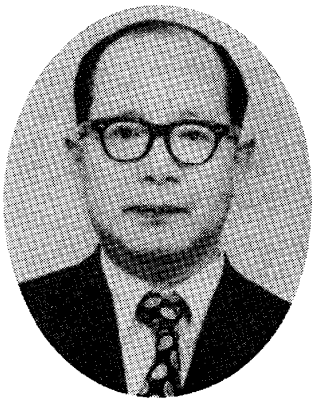
徳　永　洋　一君
（研究担当）
九州大学教授

塙　阪　力　郎君
（企画担当）
（社）日本鉄鋼連盟常務理事

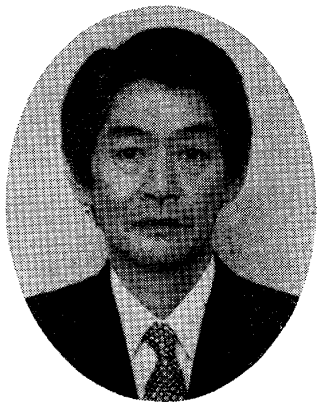
原　田　利　夫君
（企画担当）
新日本製鉄（株）取締役



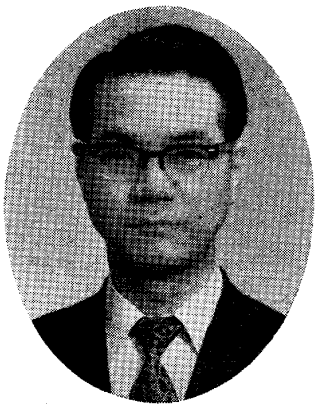
藤　岡　外喜夫君
（会計担当）
日新製鋼（株）取締役・研究管理部長



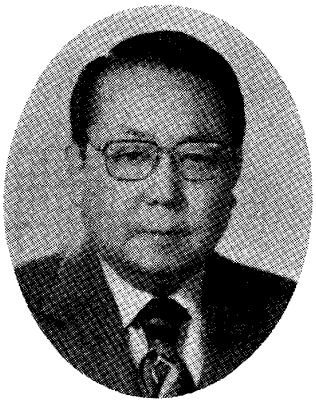
二　上　　愛君
（会計担当）
東伸製鋼（株）取締役



堀　江　重　榮君
（庶務担当）
日本鋼管（株）取締役・技術研究所長



森　　一　美君
（企画・研究担当）
名古屋大学教授

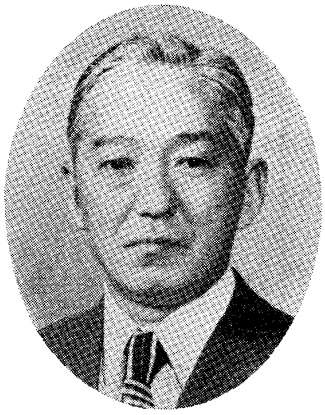


森　田　善一郎君
（編集担当）
大阪大学教授

渡　辺　十　郎君
（研究担当）
（株）日本製鋼所開発技術本部副本部長

監　　事

阿　部　芳　平君
三菱製鋼（株）常務取締役



古茂田　敬　一君
川崎製鉄（株）常務取締役

新 名 誉 会 員

武 田 喜 三 君

(大同特殊鋼(株)取締役相談役)

君は，昭和 10 年 3 月京都帝国大学工学部冶金科卒業後直ちに，日本製鉄株式会社に入社し，昭和 27 年八幡製鉄株式会社八幡製鉄所製鋼部長，昭和 36 年同社取締役本社計画部長，昭和 38 年常務取締役，昭和 43 年専務取締役堺製鉄所長，昭和 45 年新日本製鉄株式会社専務取締役名古屋製鉄所長を歴任，昭和 48 年大同製鋼株式会社取締役社長に就任し，昭和 51 年社名を大同特殊鋼に変更，昭和 57 年 9 月取締役相談役に就任し，現在に至つている．

君は，日本製鉄入社後一貫して製鋼技術の近代化に注力し，特に純酸素上吹転炉の将来性に着目し，昭和 31 年日本最初の酸素上吹転炉を八幡製鉄所に導入した．これは当時としては世界最大級の転炉であり，日本鉄鋼業の発展の基盤となつた．また，君が建設を推進した戸畑製造所，堺製鉄所及び君津製鉄所はいずれもその時点においては世界最大級の銑鋼一貫製鉄所であり，特に戸畑製造所は世界でも画期的なわが国最初の全面海域埋立によるいわゆる「海に築く製鉄所」であつて，近代高炉建設の先駆となつたものである．

昭和 48 年大同製鋼社長に就任後は，省エネルギー，省資源が社会的，経済的要請として高まるや，君は連続鋳造法の有利性に着目し，特殊鋼業界にも必ずや連続鋳造の時代が到来することを鋭く予見し，昭和 55 年特殊鋼専用連続鋳造機としては世界で初めての大断面連続鋳造機の稼動に成功，昭和 57 年世界初の複合製鋼プロセス（電気炉溶解—DLF 処理—真空脱ガス処理—連続鋳造）に結び付け，特殊鋼製造技術に一大革新をもたらし，特殊鋼業界での普及発展につながつている．

君は，昭和 48 年以来日本鉄鋼連盟特殊鋼部会長の要職にあつて業界の指導育成に当ると共に，懸案であつた特殊鋼業界の再編成を促進，その実現を果し，昭和 51 年大同製鋼，日本特殊鋼，特殊製鋼の三社を合併，世界最大規模の特殊鋼メーカー大同特殊鋼を実現させた．

以上の数々の優れた業績に対して，本会より昭和 23 年香村賞，昭和 29 年俵論文賞，昭和 37 年服部賞，昭和 40 年協会事業功労賞，昭和 50 年製鉄功労賞，昭和 53 年渡辺義介賞を受け，昭和 52 年藍綬褒章，昭和 57 年勲二等に叙せられ瑞宝章を授与された．さらに，アメリカ鉄鋼協会（AISI），ドイツ鉄鋼協会，ラテンアメリカ鉄鋼協会（ILAFA）の名誉会員，日本金属学会の名誉員である．

君は，本会をはじめとして学会の活動に大いに寄与した．昭和 32～39 年にわたつて本会共同研究会製鋼部会長として業界の製鋼技術の指導発展に尽力すると共に，本会役員としては昭和 33 年以降，理事に 4 回 8 年，他に副会長 2 回 3 年，昭和 55 年 4 月より 2 年間会長を勤めた．会長時代は，協会事業の隆盛に心血を注ぎ，とくに鉄鋼圧延国際会議を初めて開催して各国から賞賛をうけ，材料集合組織国際会議を成功させ，また日本—中国鉄鋼学術会議を発足させるなど本会発展に大きい貢献をした．また，昭和 53 年度においては，日本金属学会会長に任ぜられた．

新名誉会員

佐藤忠雄君

君は昭和8年3月東京帝国大学工学部鉱山および冶金学科を卒業，海軍技師，海軍技術士官を経て，昭和20年11月鉄道技術研究所に入り，鋳鍛研究室長を歴任後，昭和32年1月日本特殊鋼(株)に入社，製鋼部長，取締役製鋼部長，取締役技術研究部長，常務取締役技術本部長，取締役技師長等を歴任，昭和51年9月日本特殊鋼(株)と大同製鋼(株)合併後，大同特殊鋼(株)嘱託として現在に至つている．

君は海軍在任中主として航空機用材料の開発研究に当り，零式戦斗機に使用された超々ジュラルミンの疲労強さについて「重複荷重による疲労に関する研究」を発表，機体の疲労寿命の算定にその成果が採用され，この研究により学位を得た．このほかケルメット軸受の研究，無ニッケル高力銅合金の研究，無ニッケル超耐熱合金の研究など，戦時下の合金元素不足に対処し代用材の開発，実用化に功績を挙げた．

鉄道技術研究所にあつては，主に鋳造技術の改善進歩に関する業務に従事し，低質コークスによるキュポラ高温溶解操業法の研究で成果を挙げた．また，鋼鋳物の鋳造技術について，日本学術振興会第24委員会において「電気アーク炉の酸素吹込みによる酸化期精錬の作業標準および生型鋳造作業基準」を報告している．

日本特殊鋼(株)においては構造用合金鋼，工具鋼，軸受鋼，航空原動機および発電機用ガスタービンならびにスチームタービン用超合金など特殊鋼全般に亘る製造技術の進歩，品質管理と保証技術の確立に顕著な貢献をした．この間東京大学で15年間，および法政大学で30年間非常勤講師を勤めた．

そのほか戦前戦後を通じ40余年に亘り工業標準化事業に関与し，日本航空材料規格の制定に当つたのをはじめ，工業標準調査会専門委員会委員ならびに専門委員長，鉄鋼部会委員として日本工業規格の制定に参画，特殊鋼の地疵，非金属介在物，肉眼組織の試験方法など鋼の品位判定基準の統一を図るなど，その整備，充実，普及に尽力した．

君はこれらの功績により，海軍時代には技術有効賞を受け，本会からは昭和30年に協会事業功労賞，32年に渡辺三郎賞，日本鋳物協会からは昭和30年小林賞，32年および57年功労賞を贈られ，昭和47年には工業標準化事業の功績により通商産業大臣表彰をうけた．また昭和56年勲四等に叙せられ瑞宝章を授与された．

この間，君は本会の主要事業である編集出版活動において昭和21年に編集委員会委員に就任，爾来40年近くに亘り多大の貢献をしている．昭和26年以降理事就任4回8年，昭和32·33年，35·36年，38·39年の3回6年間は編集委員長として活躍した．その間会誌「鉄と鋼」の充実，現在の欧文誌の前身 Tetsu-to-Hagané Overseas の創刊，講演大会の企画運営，特に討論会を創設し，今日の発展の基礎を築いた．また会員の教育啓蒙のため出版活動の重要性を唱え，研究成果の特別報告書，鋼材マニュアルシリーズの編集刊行（協会発行），鉄鋼便覧，鉄鋼製造法，鋼の熱処理，鉄鋼材料便覧など本会が戦後編集した図書の大多数は，君がその情熱を注いだものであり，特に昭和54年から昭和57年秋にかけて編集刊行（丸善出版）した全6巻7冊よりなる「第3版鉄鋼便覧」は君の出版活動の集大成といえる．